

市史編さんの1コマ



No. 2

市史編纂専門部会（先史・古代編）を開催（令和7年7月22日）



先史古代編の執筆を担当していただく先生方にお集まりいただき、専門部会が開催されました。

執筆範囲の確認や、市史の体裁について話し合われました。体裁（大きさや重さ）の議題では、「読者ファースト」という言葉がだされ、いかに市民の皆さんに手に取り易く、親しんでいただける市史に仕上げるかを重要視する意見が出されました。

また、曾於市は「シラス台地のメッカ」というご指摘もあり、曾於市ならではのものを市史で扱いたいという先生方の熱い思

いが伝わってくる会議となりました。

市史編纂専門部会（民俗・文化財編）を開催（令和7年8月5日）

市史編纂のなかでも民俗・文化財編は、市民の皆様からの情報が必要不可欠となる分野です。地域の伝統的な衣食住、行事、民話、信仰など地域特有のものを市史に収録する計画です。

岩川の弥五郎人形行事の調査にご尽力いただいた牧島知子先生を部会長に迎え、委員には地域の文化財に精通された市文化財保護審議委員6名が委嘱されました。

会のなかで、委員より「たい（带状疱疹）を治すまじない」や「さのぼり」のことが話題としてだされました。このように、地域に伝わるものを情報として集め、調査し、市史に収録していきます。



コラム:読みやすい市史の体裁は？

体裁は市史に対するイメージを左右する大切な要素です。体裁を決める際の検討事項はサイズ、重さ、頁数、文字方向、カラーか白黒かなど多岐に渡ります。

近年県下で刊行された例では、お隣の志布志市誌はA4判上下2巻組白黒刷り、一方、徳之島町史通史編はB5判2巻組オールカラー刷りで刊行されるなど自治体によって体裁は様々です。

「辞書のようにズシリと重いと市民に手に取ってもらえないのでは?」、「図や写真は大きなサイズが見やすいのでは?」等々、編纂サイドの悩みは尽きません。また、サイズや重量が大きくなると刊行後に在庫を管理することとなる事務局の肉体的負担が増すという裏事情もあります…。現在、先生方にご意見をいただきながら体裁の検討を進めています。「市民の皆さんに親しんでいただける曾於市史」の体裁はいかに？